

高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川1225-1
電話・FAX 0740 (32) 4156「今、なぜ、
中江藤樹なのか」

久保田 暁一

今日の日本社会が直面している諸問題、例えば、家庭での子ども虐待事件、いじめから起こる子ども自殺事件、頻発する人命の殺傷事件、震災による被災者の救済問題等々を直視した時、今こそ、私は、中江藤樹の思想と生き方から学び、教えを生かして歩んでいかねばならないと思う。何故なのか、その理由を述べたい。

第一の理由は、藤樹が命の根源を明確に示しておられることである。藤樹は『翁問答』の中で書いておられる。

①「さて元来をよくおしきはめてみれば、わが身は父母に受け、父母の身は、天地に受け、天地は太虚に受けたるものなれば、本来わが身は太虚神明の分身変化なるゆえに、太虚神明の本体を明らかにしてうしなはざるを、身を立つると云也。」

(上巻之本)

②「ばんみんなはことごとく天地の子なれば、われも人も人間のかたちあるほどのものはみな兄弟なり」

(上巻之本)

③「天道を根本として生まれでたる万物なれば、天道は人物の大父母にして根本なり。根本の天道、純粹至善なれば、その枝葉の人物もみな善

にして悪なしと得心すべし」

(上巻之末)

ここに挙げた三つの文章は、人間として生きるべき根本的な道を教え示し、人間信頼と、「畏天命」および「愛敬」の心を持つて生きる事の大切さを説かれている。

第二は、藤樹が師弟同行の教育の大切さを身をもって示されていることである。藤樹は愚純の弟子の大野了左のために膨大なテキスト『捷徑医荃』を書き与えている。また藤樹は、家庭教育、親と子のあるべき道「孝」の問題や子どもの年齢と発達段階に応じた躰・教育法を具体的に示しているなど、学ぶべきことが多し。更に藤樹は、わたしたちに「眞吾」の形式について教示してくれている。村落の教師として生き、弟子や隣人と共に歩み、天意にかなった自己確立を求めつづけた藤樹であった。藤樹の生き方と思想から深く学ばねばならないと私は思う。



ひじりの声

上田 藤市郎

藤樹書院の中へ入ると、左上の鴨居の所に「藤樹規」という額が掲げられている。藤樹書院で学ぶ人達に向けて、先生が三十二歳のときに書かれたもので、学びのための心がけとでもいうものである。

私たちが、何かを確実に実践したいと強く願う時には、ただ心の中で思っているだけでは不安で頼りなく思えてきて、文字に書いて貼り付け自分への呼びかけのようにすることがある。一年の計や勝利を願うときなどによく見かける。「藤樹規」の末尾で、先生は、「学び」とは、知識を多くもつことではなく、言葉や行いで実践すべきだと述べておられます。

「論語(公治長第五)」の一文、『子曰く十室の邑にも、必ず忠信、丘の如き者有らん。丘の學を好むに如かざる也。』について、吉川幸次郎先生は、「孔子によれば、素朴なひたむきな誠実、それだけでは完全な人間ではないのである。学問をすることによって、人間ははじめて人間である。(新訂中国古典選朝日新聞社)」と言っておられる。

藤樹先生の「学ぶ人間」への強い思いが「藤樹規」には込められている。